

発見!

たからモノ ただみの文化遺産

第2回

ぼんじ
梵字まんが

顔を描いた梵字の『諸尊種子』



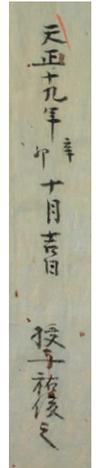
瀧泉寺蔵「諸尊種子」



不動明王



天正19年奥書 祐俊が伝授を受けた自署



只見町黒谷の瀧泉寺蔵「瀧泉寺聖教典籍文書」(町重要文化財)には、多数の室町時代・安土桃山時代の古典籍があります。その一つが、関東や会津で書物を書写して収集した学僧祐俊(1548~1606~?)が、天正19年(1591)に下野国足利で伝授されて描いた『諸尊種子』です。

ここには、五大明王(不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の明王)が、梵字で描かれています。梵字とは、古代インドのサンスクリット語の文字で、母音と子音で構成される表音文字です。仏を一字で標示した梵字を種子といいます。塔婆に書かれた梵字は死者を供養する意味ですが、現在では梵字のパワフルな意味とデザインが注目され、お守りとしての梵字アートにもなっています。

『諸尊種子』は、仏を表す梵字に“顔”が描かれ、一画一画が延長されて装飾線となり、仏の姿にかたどられています。本来の種子は、仏を意味する表音文字であり、“仏の姿”を現しているわけではありま

せん。しかし、『諸尊種子』は文字が装飾されて“仏の姿”になっています。

五大明王は、忿怒の形相で悪魔を降伏しますが、こちらの五大明王はみなユーモラスです。右端の不動“カンマーン”(“ ”内は梵字の読み。以下同じ)は右手の剣と左手の綱を持っていますが、お土産を持って杖を振っているように見えます。次の降三世“ウン”・軍荼利“ウン”は背と足が描かれて動きがあり、ペアのダンシングに見えます。左端の金剛夜叉“キリーク”には両腕が見えます。素朴な愛らしい表現の民衆画で、いわば梵字まんがです。

この『諸尊種子』と同じ伝授系統で描かれた顔のある梵字絵が、東京駒場の日本民藝館蔵『種子絵巻』です。民藝運動を提唱した柳宗悦さんが収集したものです。民藝運動は、民衆の工芸に美的価値を見いだしました。柳さんは顔の梵字を見て、素朴な美しさにひかれました。柳さんが見いだした素朴美の梵字絵が、只見に存在します。

文・写真：久野俊彦



ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示情報



第1回テーマ展「ただみ・冬の暮らし」

会期：1月31日(火)~5月28日(日)

場所：ただみ・モノとくらしのミュージアム 展示ホール